

政治家の判断基準

—ある政策に関する政治家の語り・対人関係—

一橋大学社会学研究科・日本学術振興会特別研究員 DC1 國本哲史

1 目的

この報告の目的は、 α 市議会における、ある政策への地方政治家の語りから、彼らの判断基準を記述的に明らかにすること。そして、その基準に対して、他の議員や市民の影響を考察することである。

昨今の日本の政治状況は、市民的デモの活発化や、学者たちからの政治変革が唱えられるなど、多様な動きを見せている。そのような動きの中で、政治に中心的に関わっているアクターである政治家の、政策への賛否の態度が、彼ら自身によりいかにして意味づけられ、正当化されているのか、環境的要因（他の議員や市民）がどのように影響しているのか、といった事柄が明らかにされることは一定程度の意義を有していると考えられる。

2 方法

他者に自分の判断基準（延いては自分の価値）を認めてもらうためには、どのようにその基準を説明するかが重要である。ここでは、他者に理解可能な形で意味づけられ、正当化された理由があると考えられる。特に、公的なものとされる、政策への態度決定を行う政治家は、そのような強制下に置かれていると言える。

この判断基準を聞き取るために、本報告は半構造化インタビューを用いて、政治家の語りを聞き取った。対象は、 α 市議会に属する党・派閥、少なくとも一名以上に手紙によって依頼を行い、実施された。質問は政策に関するものだけになされたのではなく、環境的要因に注意を払い、彼らのライフストーリーと、他の議員や、市民についてのイメージや要求についても聞き取っている。

3 結果

分析の結果、彼らの判断基準はどちらの立場であっても、報告者にとっては理解可能であり、どちらの立場でも妥当な意味付けが行われていた。また、彼らの判断基準は、 α 市および α 市議会から多くの影響を受けてはいなかった。すなわち、彼らの基準は、彼らの所属する政党や、参加する勉強会、または自身の直接的な経験に従っており、他の議員についての認識は安易なイメージで終始し、市民の要求は自分の基準に対してどの政治家もポジティブなものであると考えていた。

4 結論

以上から、 α 市議会では、 α 市議であるということの統一的な意識を欠いており、党や派閥、さらには個人同士の間で越えがたい断絶があることが示された。このことは、政策にもよるだろうが、 α 市議会の政策決定が単純多数決に陥っていること可能性を示している。